

人物点描 後陽成天皇／如月寿印

小林 千 草

最近、あいついで後陽成天皇（一五七一

）一六一七 在位期間は一五八六―一六一

一）の御宸筆に出会う機会があった。その一
つは、出光美術館「開館25周年記念特別展第
2部」における和歌色紙である。

「むらさきの いろにぞ そまる かきつば
た いけのぬなはの はひかゝりつゝ」

鮮やかに咲きそめた杜若を「紫色に染ま
る」と表現しておられるが、緑の茎先がいつ

の間にかちつくりと明し薔（より正確には苞
）と言ふべきであろう）となり、いつしかそれ
が花と開く。それは、あたかも白地に紫の染

料が染みわたるいくようである。

かきつばたは、万葉集でも美しいものの一
つとして詠まれているが、何と言っても、伊
勢物語の「三河の國、八橋といふ所にいたり

ぬ。（略）その澤にかきつばたにおもしろ
く咲きたり。それを見て、ある人のいはく、

「かきつばたといふ五文字を句の上にすへて、
旅の心をよめ」といひければ、よめる。から

衣きつゝなれにしましあればはる／＼きぬ
る旅をしぞ思（ふ）」（古典大系116頁）が、こ

の花を有名にした。根津美術館蔵の国宝「燕
子花図」（六曲一双）屏風は、この章段に想

を得たものと言われている。

屏風絵のかきつばたと宸筆のかきつばたの
違いは、「いけのぬなはの はひかゝりつゝ」

である。「ぬなは」とは、蓴菜の古名であり、
日本国語大辞典を引くと、『鷹筑波』の「ぬ

なわにてゆふや小池のかきつばた」があがっ
ている。鷹筑波は山本西武編で一六四二年の

成立であるから、発想的にも宸筆の方が先で

あることが注目される。

天皇の目は、美しくすつくりと咲くかきつ
ばたの茎元に及んだ。蓴菜のからまりをいと

おしむやさしさが、そこにある。自然のある
がままを受け入れようとする心の広さが認め

られる。

「聯句／菊何ッ言ニ晩節ト 秀賢／今
独伴花魁ニ 同／松自生天節／如此書
誤候間迎之事ニ今一ツ被書付而可給候／季秋

初七（花押）／式部少輔殿
これは、もう一つの宸筆で、京都市歴史資

料館で行なわれた「寄託品特別展・燈心文庫
の史料II 公家・武家・寺家」の図録（鈴木

博氏より恵与さる）に収録されているもので
ある。図録解説には、「舟橋秀賢（一五七五

）一六一四）と後陽成天皇の贈答による五言

聯句の懷紙であるが、天皇の書き誤りから消息となった。最初の3行が秀賢筆。続く天皇

の「松自生天節」の「節」が、うっかり秀賢の一句にある「節」に重なったため、天皇がそのまま秀賢に書き直しを求めた消息としたのである」と記されている。天皇のたまたまの書き誤り（「書き損じ」という語は、まだこの当時見られない）ゆえに、この書状は今に二人のなごやかな親交を伝えることとなった。

ろうか。

☆

後陽成天皇は、天皇という天下の公職に立っておられたので、宸筆ということにこだわらなければその言動を知りうる史料は豊富である。ところが、時代が一時代さかのぼり、禅僧となると、その事跡を追うのがかなり困難となる。その一人として、『中華若木詩抄』の抄者として伝わる如月寿印の例をあげよう。

中華若木詩抄の寛永版本（勉誠社刊）の冒頭には「東山如月和尚註」とあり、この人物については、中田祝夫氏が前掲書の「解説（一）作者如月寿印」で種々言及しておられる。そのうち、『倭版書籍考』（辛島宗意）の「後ニ還俗ス」を今問題としたい。還俗した者の負い目は、禅宗・キリシタンなどにおいて大きかった（キリシタンに関しては、小説形態ではあるが、千草子「ハビアン」藍は藍より出でて「Fabian Racuit」羽給へ、若王子）

「ともに清文堂刊」参照。その人物が還俗する前華々しくあればある程、それに見合う世間の誹謗・中傷がある。そのようなものについて一番耳ざといのがお伽衆である。お伽衆は、聖と俗、富と貧、男と女等々落差の大きい話を好む。如月の場合もしかり。咄本の一つ

太田牛一（一五二七—一六一〇+a）は『大からさまぐんぎのうち』の冒頭に、「そも『当今様は、百王百代このかたの聖王也。第一に、御果報の王位也。第二に、御宸筆世にすくれ、和歌の道達者也。第三に、諸学御器用の故、昼夜、御沙汰、候。詠。撰家、清華、そのほか、御宮仕の若き方々、家風を学問候へと、御暇を下され、且は御慈悲、且は天下の御為、ありかたき給命也。しかなら、王法、仏法、ともにもつて、ます／＼、繁昌たるへき基也』（慶応義塾図書館をあてたが、原姿はふり）と記しているが、二種がなとして残してある」と記しているが、二種の宸筆に接した今、この表現を誇大には感じられなくなった。かきつばたの茎元に目の及ぶ方は、やはり聖王にふさわしいのではな

『寒川入道筆記』（一六一三年成立）には「如月小喝食之時悪狂ケレハ、小喝口ヲ如鶴佳月」

（断本大系一9）といひ、頭の切れすぎる

「文殊喝食」としての若き日の如月が描かれ、

「醒睡笑」（安楽庵筆伝）には「洛陽に、寿桂といふ坊主落墮し、姪女なりける比丘尼を

妻にもちて居けり。越方の等閑なきに宿を尋

をとつゝが、彼寿桂家の外隔心し、内へよ

ばざりけれハ、腹立のあまり、元理 秘蔵し

て人に見せぬハめいのもの あまくなれば

身をもはなたず」（同上二68）と、還俗後の

姿が伝えられている。「寿桂」は、師の月舟

寿桂と混同したもので（あるいは、作為的な

粉飾）、寿印のことをさしているとみられる。

元理は、禅僧で連歌師として天文年間に活躍

した人物。如月とはほぼ同時代人とみてよい。

『繫驢檄』に拠ると、如月は「乗弘之時有魔」

と記されているが、これと、○の逸話、そし

て中華若木詩抄にみなざる情緒性を考えた時、

「魔」とは、不干ハビアンを襲つたものとは

とんど違わないのではないかと思うのである。